# 知床国立公園における利用動向調査について

**渡辺　修・大谷直史**

〒060 札幌市北区北17条西12丁目　　北海道大学自然保護研究会

## はじめに

自然公園における利用動向調査は、利用者の意向を探る手段として、利用の質や量を推定し自然利用の価値を設定するために実施されてきた。特に最近は自然公園の役割として、貴重な自然を保護すること以上に野外教育（環境教育）の場としての役割が強調されるようになってきている（沼田、1982)。また、森林のレクリエーション利用についても、①国民のニーズが高まってきている②林業を消費者に知ってもらう必要性があるなどの側面から重視されつつあり、森林公園やレクリエーションの森の整備も進められてきている。

しかし利用の推進が叫ばれる一方で、それに対応するような利用者意識の研究はあまり進んでいない。一般車両の交通規制や、入園料（入山料）の徴収、自然観察プログラムの作成などの自然利用における具体的な課題に対処していくためには、意識調査による構造的な実態把握が必要であろう。

自然保護研究会では、1989年から90年にかけて国立公園利用客および国立公園に近接した斜里町ウトロ地区の住民を対象に、自然利用と自然に対する捉え方に関する意識調査をいくつか行なってきた（表１)。これらの調査の目的は、国立公園における利用動向を把握することと、利用者が自然をどのように捉らえているのかを把握することにある。すでに結果の一部については報告を行なっている（渡辺・大谷，1992：渡辺，1992 ab）が、今回の報告では、知床国立公園における利用の動向について、他調査の結果も含めた整理を行ない、これらの調査の結果を利用する際に留意すべき点について簡単にふれてみたい。

## 利用動向調査について

ここでは、知床国立公園において行なわれた調査の結果を調査報告書等から抜粋・整理して検討することにする。ここ20年の間に斜里側で行なわれた主な動向調査には表２のようなものがある。いずれの調査も観光客に対してアンケート形式で回答を求め集計したもので、回答者数は500～1000程度が中心となっている。調査時期に関しては８月に集中しているので、以下の検討はあくまで夏期の利用者にあてはまるものであることに注意する必要がある。

**表１**　知床における意識調査（自然保護研究会、1989－1990)

| No | 対象 | 年次 | 回答者数 | 用紙枚数（B４） | 調査内容 利用動態 | 接触 | イメージ | 知識 | 保護 | 観光 | リゾート | 施設 | 規制 | 動物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 観光客 | 1989. 8 | 857 | 1 | ▲ | ● | | ● | ● | ● | ● | | | |
| ② | 〃 | 1990. 6 | 122 | 2 | ● | | | | ● | ● | | ● | ● | ● |
| ③ | 〃 | 1990. 8 | 488 | 1 | ● | | | | ● | | | ● | ● | |
| ④ | 〃 | 〃 | 510 | 1 | ▲ | | | | ● | ● | | | | ● |
| ⑤ | 住　民 | 1989. 8 | 174 | 1 | － | ● | | ● | ● | ● | ● | | | |
| ⑥ | 〃 | 1990. 11 | 262 | 3 | － | | ● | | ● | ● | | ● | ● | ● |

※調査内容＝利用動態/自然との接触形態/自然イメージ/国立公園の保護と利用/観光利用のあり方/リゾート問題/施設利用/車両規制問題/野生動物

※①⑤＝層雲峡・旭岳温泉・糠平温泉・阿寒湖畔・川湯温泉・釧路湿原と同時調査（総数：観光客＝4262人、住民＝722人）

**表2** 知床における利用動態調査の一覧（1978-1990）

| No | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. | 6. | 7. | 8. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 調査主体 | AB | AB | AC | E | DE | ABCD | DE | E |
| 年　次 | 1978.8 | 78.8 | 78.8 | 89.8 | 90.6 | 90.8 | 90.8 | 90.8 |
| 有効回答数 | 984 | 1,529 | 1,308 | 857 | 122 | 544 | 488 | 503 |
| 調査地点 | | | | | | | | |
| ウトロ市街 | 71 | 322 | 332 | | | | | |
| キャンプ場 | 62 | | | | | | | |
| ホテル | 98 | | | | | | | |
| 幌別園地 | | | 780 | 122 | 185 | 247 | 128 | |
| 知床五湖 | 265 | 722 | 642 | ＋ | | 172 | 186 | 269 |
| カムワッカ | 303 | | | | | 73 | 51 | 93 |
| 岩尾別温泉 | | | | | 88 | | | |
| 留め置き | 230 | 485 | 334 | 77 | | 26 | 3 | 9 |
| 用紙枚数（B５換算） | 3 | 7 | 7 | 2 | 4 | 4 | 2 | 2 |
| 調査項目 | | | | | | | | |
| ★属性 | | | | | | | | |
| 住所 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 性別／年齢 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 職業 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ★訪問形態 | | | | | | | | |
| グループ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | | |
| 交通手段 | △ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 宿泊施設 | ○ | ○ | | | | | | |
| 旅行日数 | △ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 周遊コース | ○ | △ | △ | | ○ | ○ | | △ |
| 知床利用地点 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | |
| 訪問回数 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 旅行の動機 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | |
| 知床での行動 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | |
| ★知床での旅行について | | | | | | | | |
| 現状評価 | ○ | ○ | △ | ○ | | ○ | ○ | |
| 印象・満足感 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | |
| 再訪するか | ○ | ○ | | | ○ | | | |
| ★周遊型旅行について | | | ○ | ○ | | ◎ | | |
| ★自然観察について | | | | ◎ | | | | |
| ★車両規制・費用負担 | ○ | | | | | ◎ | | |
| ★100m²運動 | ○ | | | | | | | |
| ★保護意識 | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | |

※引用は、１２３＝環境庁（1981）、４＝北大自然保護研究会（1990）、６＝国立公園協会（1990）、７＝北大自然保護研究会（1991）、５８＝北大自然保護研究会（未発表）から行なった。

※調査主体;A＝環境庁／B＝国立公園協会／C＝斜里町／D＝しれとこ管理財団／E＝北大自然保護研究会

※これらの調査は、羅臼側でも実施されている。

## 結果と考察

### 1．利用者の属性

各調査における利用者の基本属性および利用形態は、表3のようになっている。大まかな傾向としては、男女比＝7：3で、学生を中心とする若年層と、3～40代の家族連れを主体としていることが分かる。また、道内外比＝3：7で夏期に関しては道外者が多い傾向にある。

調査によって属性に若干変動が見られるのは、調査地点（図1）の違いによる対象者の違いが原因であると思われる。例えばキャンプ場などでの調査では、若年層・道外客・バイク利用者が多い傾向がある。このような偏りは調査実施の都合上やむを得ないものであり、これらの調査結果から観光利用の現状を分析する際に、このような層の差を考慮する必要があると思われる。

公園利用における時間的な変化としては、1980年に知床横断道が開通し入込み数が大幅に増加したことが挙げられる。しかし、開通以前の調査1．2．の結果と、それ以降の調査結果で、客層に大きな変化は生じてないようである。ただ交通手段に関しては、路線バスの利用者の割合が減った傾向が見られた。

### 2．他の観光地との比較

北海道内の4国立公園7地点で実施した調査4．の結果をもとにして、知床・ウトロ地区の夏期の利用客の属性を他の国立公園内観光地と比較した（表4）。道内の観光地には、ツアールート上に存在し道外利用者が中心となっている観光地と、近郊都市の利用者が中心の観光地があり、それぞれ利用行動にも違いが見られる。特に道内利用者は、道外利用者の多くが狭義の観光目的であるのに対して、ボート・キャンプなどの野外レクリエーションを目的とした「レジャー利用型」と登山・散策目的の「登山利用型」、観光・保養目的の「観光利用型」の3つのタイプに分けることが出来る。また年齢・性別などの属性における差も、このような利用行動の違いを反映している。

そこで、この利用行動の違いから利用客を

**表3　各調査における対象の属性と利用形態**

| No | 1． | 2． | 4． | 6． | 7＋8． |
|---|---|---|---|---|---|
| 年　次 | 1978．8 | 1978．8 | 1989．8 | 1990．8 | 1990．8 |
| 回答者数 | 984 | 1,529 | 857 | 544 | 991 |
| ◆住所 | | | | | |
| 道内 | 38.0% | 19.9% | 30.1% | 29.7% | 30.6% |
| 道外 | 62.0% | 78.8% | 68.6% | 69.4% | 68.6% |
| （関東） | (26.2) | (35.2) | (32.0) | (38.5) | (35.8) |
| ◆性別 | | | | | |
| 女性 | 38.0% | 43.6% | 35.1% | 34.9% | 28.8% |
| 男性 | 61.8% | 56.3% | 64.9% | 62.5% | 70.2% |
| ◆年齢 | | | | | |
| 10代 | 16.1% | 16.5% | 14.4% | 17.1% | 7.5% |
| 20代 | 56.4% | 54.8% | 43.8% | 40.9% | 43.0% |
| 30代 | 11.7% | 8.2% | 13.1% | 13.9% | 15.6% |
| 40代 | 9.6% | 9.7% | 17.0% | 15.1% | 18.7% |
| 50代 | 3.1% | 6.6% | 8.6% | 7.4% | 8.4% |
| 60代～ | 2.6% | 3.7% | 3.2% | 1.8% | 3.3% |
| ◆職業 | | | | | |
| 農林漁業 | 1.7% | 1.6% | 0.7% | 0.9% | 1.0% |
| 自営業 | 4.3% | 2.9% | 2.2% | 5.8% | 8.9% |
| 管理職 | | | 8.3% | 9.8% | 11.8% |
| 事務職 | 37.2% | 32.0% | 17.0% | 21.0% | 22.3% |
| 商業労働者 | （会社員） | | 2.8% | 2.4% | 4.2% |
| 産業労働者 | | | 4.8% | 7.7% | 12.9% |
| 主婦 | 8.2% | 6.5% | 10.5% | 8.3% | 10.3% |
| 学生 | 36.7% | 48.1% | 42.0% | 37.7% | 22.6% |
| ◆グループ | | | | | |
| 一人 | 10.1% | 8.0% | 14.1% | 18.0% | |
| 家族 | 39.4% | 21.5% | 38.9% | 41.0% | |
| 友人 | 27.1% | 44.8% | 36.5% | 37.0% | |
| 学校 | 15.3% | 4.6% | － | － | |
| ツアー | 6.3% | 9.6% | 8.4% | － | |
| ◆交通手段 | | | | | |
| 自家用車 | 62.8% | 33.2% | | 44.3% | 52.7% |
| レンタカー | ＋ | 3.8% | | 11.8% | 14.1% |
| 観光バス | 8.9% | 20.4% | | 8.1% | 8.6% |
| 路線バス | 22.0% | 36.1% | | 14.2% | 4.1% |
| バイク | | | | 9.0% | 13.4% |
| ◆訪問回数 | | | | | |
| 1回目 | 78.4% | | 63.6% | 57.0% | |
| 2回目 | 13.4% | | 14.9% | 20.0% | |
| 3回目～ | 8.3% | | 19.6% | 20.0% | |
| ◆旅行の動機 | | | | | |
| 美しい風景を見る | | 50.3% | | 42.6% | |
| 自然にふれる | | 45.0% | | 55.7% | |
| 動植物を観察する | | 9.2% | | 21.5% | |
| 人々・風俗にふれる | | 15.7% | | 13.4% | |
| 野外スポーツをする | | 11.0% | | － | |
| 気分転換をする | | 22.1 | | 38.6% | |
| 保養をする | | 9.6% | | 21.3% | |
| 団欒・親睦を深める | | 19.4% | | 27.2% | |
| 行けるうちに行く | | 46.8% | | － | |
| ◆知床での行動 | | | | | |
| 散歩・散策 | | 60.7% | 15.8% | 28.1% | |
| ドライブ | | 45.3% | 19.0% | － | |
| 風景鑑賞 | | － | 62.5% | 58.5% | |
| 温泉 | | 17.1% | － | 36.4% | |
| キャンプ | | 9.2% | 14.1% | 18.8% | |
| サイクリング | | － | 7.1% | － | |
| 登山 | | 3.9% | 4.1% | 21.1% | |
| つり | | 8.1% | 0.9% | － | |
| 動植物の観察 | | 9.3% | 7.7% | 37.7% | |

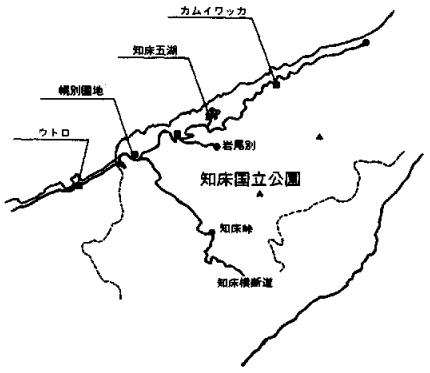


**図1**　調査地位置図

**表4**　道内観光地の利用者の特徴

| | 〈住所〉 | 〈性別〉 | 〈年齢〉 | | | | | 〈職業〉 | 〈訪問回数〉 | 〈グループ〉 | 〈行動〉 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 釧路湿原 | 道外 | ― | 20 | | | | 60 | 学生 | 1 | 友人 | 観光・ドライブ |
| 層雲峡 | 道外 | ― | 20 | | 40 | | | 学生 | 1 | ツアー | 登山 |
| 阿寒湖畔 | 道外 | ♀ | | 30 | 40 | | | | 2 | 家族 | 観光 |
| 旭岳温泉 | 道内 | ♀ | | | 40 | 50 | 60 | | 3～ | 家族 | 散策・登山 |
| 川湯温泉 | 道内 | ♂ | 20 | | | | | | 3～ | 友人 | ドライブ・キャンプ |
| 糠平温泉 | 道内 | ― | | 30 | 40 | 50 | 60 | | 3～ | ツアー | 観光・ドライブ |
| 宇登呂 | 道外 | ♂ | 20 | | 40 | | 60 | 学生 | 1 | 一人 | ツーリング・キャンプ |

※相対的に傾向の強い属性を示した。

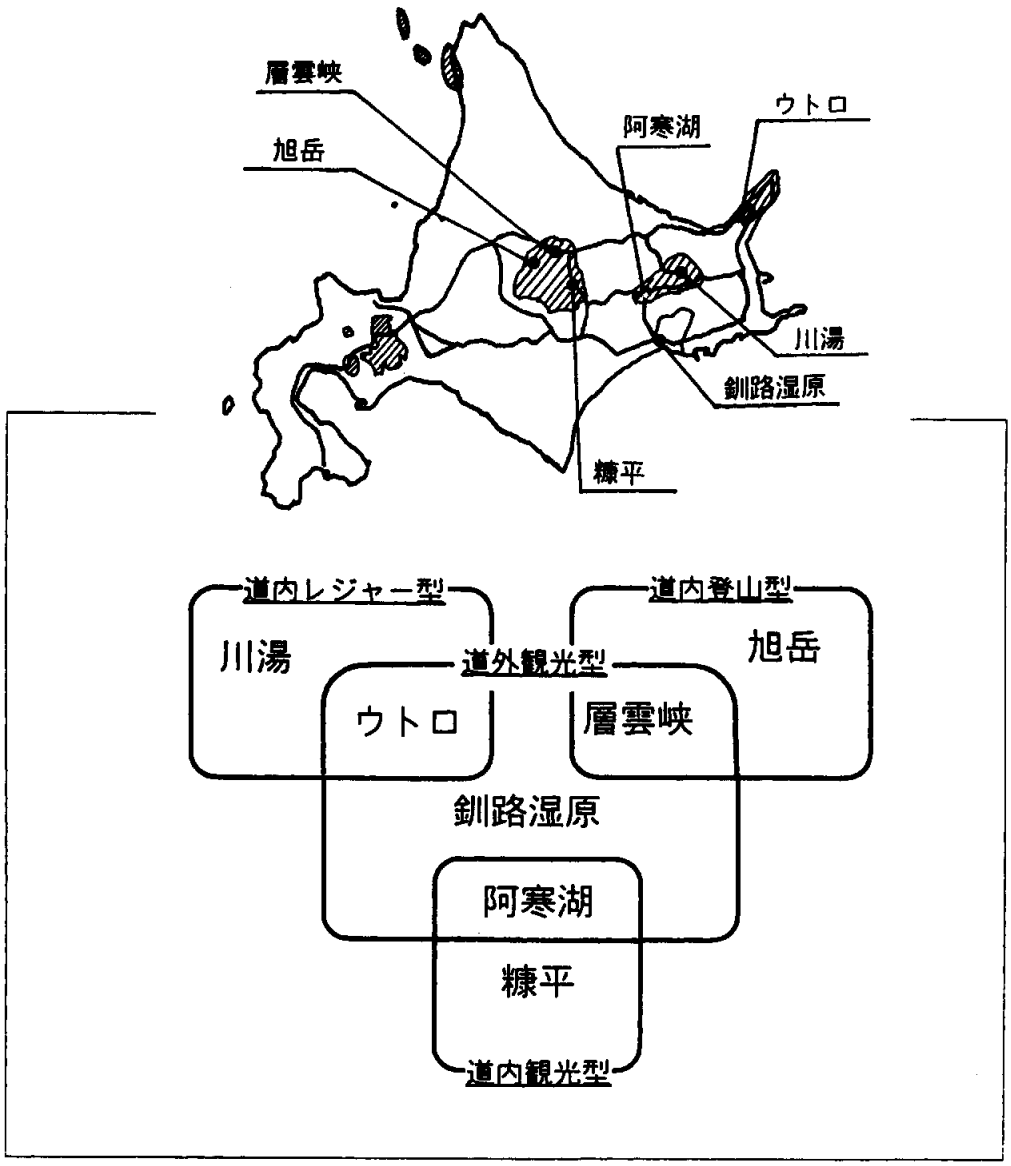


**図2**　道内観光地の利用者の特徴

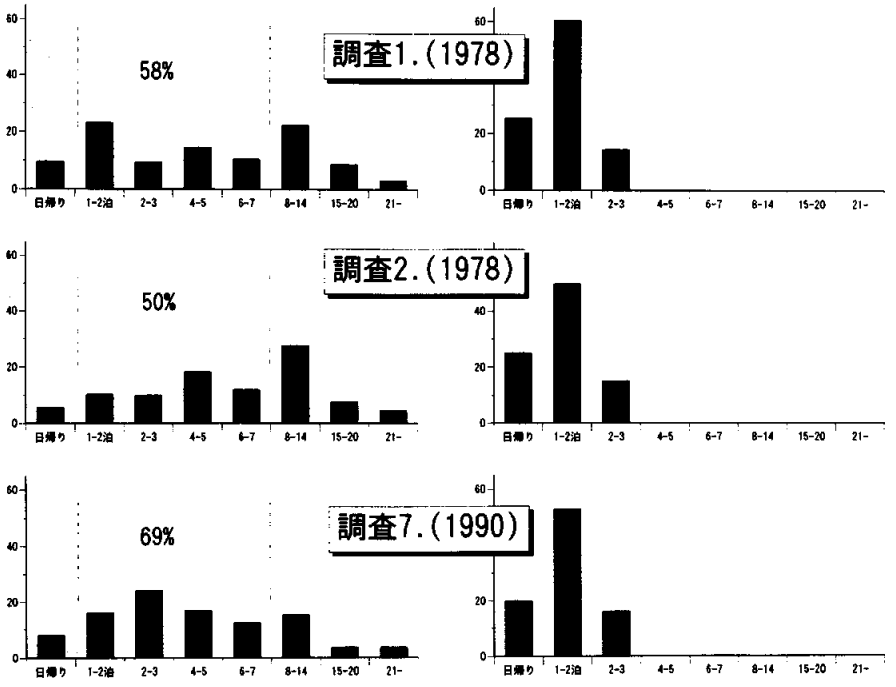


**図3**　旅行日数(左)と知床滞在日数(右)

4つのタイプにわけて各観光地を配置すると、図2のようになった。この中で、ウトロ温泉は、ツアールート上に存在するために道外観光客が多い傾向にあるが、川湯温泉等で多く見られるような「レジャー利用型」の利用者も多い。他の観光地に比して、様々な属性を持つ幅広い層から成り立っていることが特徴となっているものと思われる。

## 3．利用の形態

利用者の旅行形態は、旅行会社による観光ツアーが1割未満と少なく家族友人旅行が多くなっており、旅行日数も4、5日間から10日間という比較的長い旅行が多くなっている（図3）。しかし、なるべく多くの場所を訪問しようとする傾向は旅行日数に関わらず強く、少人数旅行でも団体旅行でも各観光地を通過または1泊するのみの「周遊型旅行」が主体になっている。また、公共交通期間が少ない北海道の状況を反映して、利用客の多くは乗用車・バイクを用いている。「滞在型の旅行をしている」と答えた人は45％と半数近かったが、実際の旅行日数と組合わせて見てみると（表5）、「長期滞在」と呼べるような旅行形態は23％しかいなかった。

属性別に検討した場合もこのような「乗用車利用ー有名観光地周遊型」は、各階層に見られ、特定の層における旅行形態ではない。しかし、これは必ずしも利用者の希望に沿うものではなく、多くの利用者がこのような形態に対して不満を述べている（図4）。もっとも多いのは「あわただしい」といった形態に関することだが、その結果としての「自然や地域にふれられない」ということも多く挙げられていた。

**表5**　旅行形態と旅行日数

| | 日帰り・1泊 | 短期〔2-5泊〕 | 長期〔6-泊〕 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 周遊型 | 14％ | 24％ | 24％ | 55％ |
| 滞在型 | | 14％ | 23％ | 45％ |

## 4．利用者の訪問目的（動機）

利用客の多くは大都市の住民であり、利用の目的・動機として多く上げられるのは「自然にふれる」ことである。しかし、これに対して実際に知床で取られる行動は、散策・ドライブ・風景観賞などの簡便な行為が圧倒的に多い。これは、旅行の形態と大きな関係があり、特に短期周遊型旅行を行なった人でそのような傾向が見られる

（渡辺，1992 a）。訪問目的は、どのような手段を選択しているのか、各人が生活の中でその利用をどう位置付けているのかということから探る必要があり、表面的な数字のみを扱うことは危険であろうと思われる。

## 5．自然公園の現状に対する評価と満足感

自然公園の環境に対する利用者の評価は利用計画を策定する上での重要な指標とみなされていることが多い。特に都市公園などにおける満足感調査の手法を適用して、どのような状態が高く評価されるのかを算定し、施設設置あるいは利用と保護のバランスの基準とすることが多い。したがって、設問項目としては、自然自体の満足度や施設に対する評価、利用人数に対する混雑感といったことが用いられるが、多くの調査結果に共通して高い満足感・現状肯定の評価が得られている（図5）。これは旅行に関する調査一般に見られる傾向であり（北海道，1981）、むしろ旅行自体に対する満足感を表象していると見ることができる。したがってこれを直ちに自然環境に対する評価とみなし、利用の動向と結びつけるのは正しい手法であるとは言い難い。実際にこれらの評価は施設への依存度や旅行形態と関係があり、評価自体も「風景がよい」という表層部分での評価から形成されている傾向がある（渡辺，1992 a）。また、滞在型旅行への志向性や、実際に滞在旅行を行なったかどうかによって自然環境への評価は異なってくる（図6）。これらのことを踏まえると、単なる現状肯定（満足）－現状否定（不満足）による評定方法は改める必要があるだろう。

## 6．自然と接する場

一般に利用者動向調査では、対象者の持っている認識構造を明らかにしようとする設問は少ない（それが容易でないという理由が大きいが）。しかし、自然利用を自然と利用者の相互作用という点で考えるならば、どのような自然認識を持って利用を行なっているのか、どのような利用形態によって利用者がどのような自然認識を獲得するのか、ということを明らかにする必要がある。例えば同じ観光目的の利用客でも、それを自然と一番ふれる場と位置付けている場合と、身近における関係を第一としている場合では、おのずと意味が異なって来るのである。

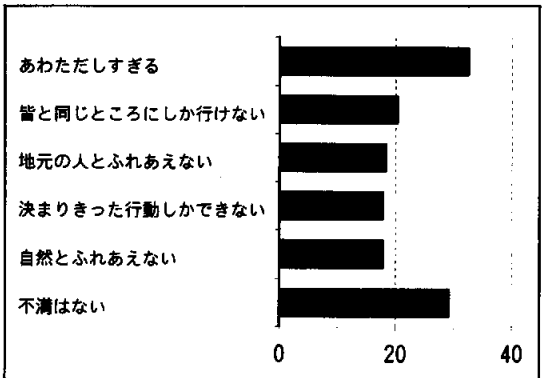


**図4**　周遊型旅行における不満点

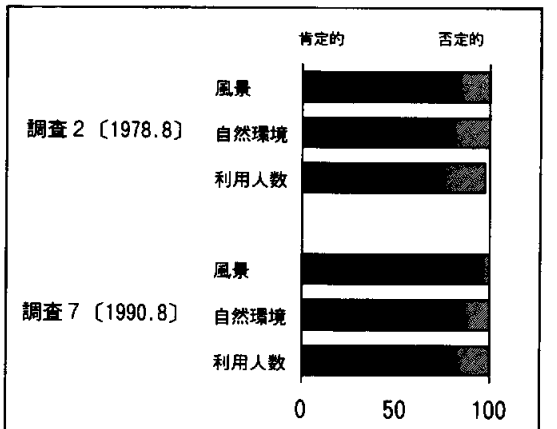


**図5**　国立公園の現状に対する評価

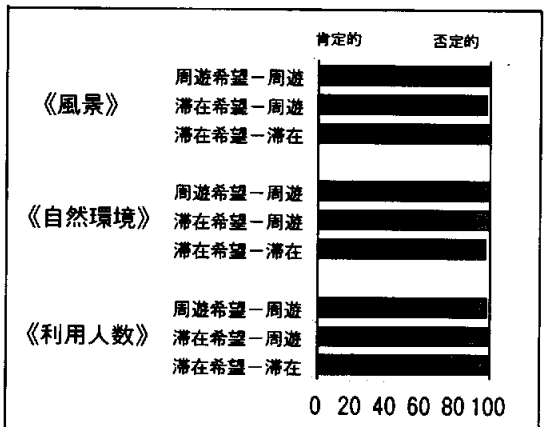


**図6**　旅行形態と現状評価の関係

ここでは調査4．で行なった「自然と一番ふれる場所」を挙げてもらった結果とその属性別傾向

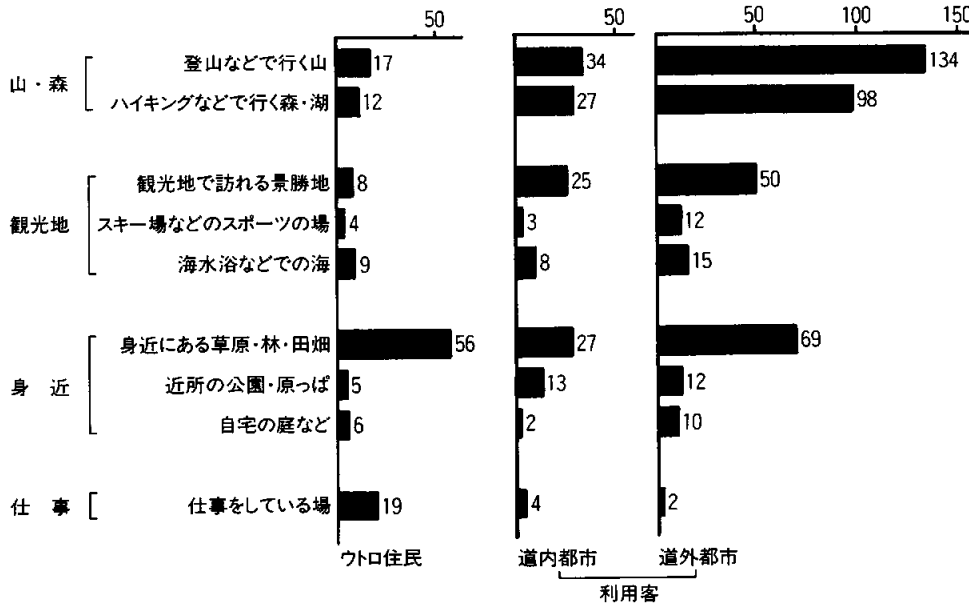


**図7**　「自然といちばん接する場」の分布

について示した（図7・表6、比較のために地元住民の結果も付した）。回答は日常的接触から非日常的接触まで分散し、女性では「身近」が多いなどの属性における特徴的傾向も見られた。日常生活に裏打ちされたものとしてこの自然接触形態を捉らえることは可能であろう。もちろんこの区分のみで利用者の認識構造を捉らえられるわけではないが、すでにこの結果を用いた比較においても自然に対する評価が異なっていることが示されている（渡辺，1992 a）。今後このような試みがなされるべきではないかと思われる。

## おわりに

自然利用の量を把握することは難しいことではないが、その質を把握するのは容易ではない。しかし、国立公園や国有林を単に観光収益を上げる場としてだけではなく自然教育の場として位置付けるならば、"質"の把握を避けることはできない。従来のように利用者の意向を利用ニーズとして捉らえ、それに対応する施設拡充等の政策を実施することに限界があるのは明らかである。自然利用を自然との相互作用と捉らえ幅広い視点から検討し、新たな方向性を見出すことが利用動向ー意識調査の役割ではないかと思う。

**表6**　「自然と接する場」の属性における分布

| ≪観光客・都市≫ | | 山・森 | 観光地 | 身近 | 仕事 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 54.1 | 20.3 | 24.2 | 1.4 |
| ・女性 | 182 | 45.1 | 20.3 | **33.5** | |
| ・男性 | 366 | **58.5** | 20.8 | 19.1 | |
| ・10代 | 84 | **71.4** | 11.9 | 16.7 | |
| ・20代 | 264 | 55.3 | **24.6** | 18.2 | |
| ・30代 | 66 | 48.5 | 16.7 | **31.8** | |
| ・40代 | 84 | 40.5 | 21.4 | **38.1** | |
| ・50代 | 58 | 48.3 | 17.2 | **32.8** | |
| ・管理職 | 41 | 53.7 | 12.2 | **31.7** | |
| ・事務職 | 92 | **59.8** | 17.4 | 21.7 | |
| ・労働者 | 37 | 43.2 | **29.7** | 21.6 | |
| ・学生 | 256 | **62.1** | 18.8 | 18.4 | |
| ・主婦 | 52 | 28.9 | **28.9** | **42.3** | |
| ≪住民≫ | | 21.9 | 15.3 | 48.9 | 13.9 |
| ・女性 | 69 | 18.8 | 11.6 | **65.2** | 4.4 |
| ・男性 | 68 | 25.0 | 19.1 | 32.4 | **23.5** |
| ・10代 | 17 | **41.2** | 11.8 | 47.1 | 0.0 |
| ・20代 | 29 | 24.1 | 17.2 | 41.4 | 17.2 |
| ・30代 | 44 | 22.7 | 15.9 | 45.5 | 15.9 |
| ・40代 | 13 | 30.8 | 15.4 | 46.2 | 7.7 |
| ・50代 | 34 | 5.9 | 14.7 | **61.8** | 17.7 |
| ・漁業 | 22 | 18.2 | 22.7 | **40.9** | |
| ・自営 | 12 | 25.0 | **41.7** | 25.0 | 8.3 |
| ・主婦 | 35 | 17.1 | 5.7 | **74.3** | 2.9 |
| ・5年以下 | 34 | 17.7 | 14.7 | **58.8** | 8.8 |
| ・6～20年 | 40 | **27.5** | **22.5** | 47.5 | 2.5 |
| ・21年～ | 41 | 17.1 | 17.1 | 46.3 | **19.5** |

## 引用文献

北海道大学自然保護研究会，1990：自然に対する認識と意識に関する研究，pp.30.

北海道大学自然保護研究会，1991：車両規制計画に関するアンケート調査報告書 ― 国立公園に対する意識を背景として ―，pp.67.

北海道生活環境部自然保護課，1981：北海道における自然公園利用の状況，pp.71.

環境庁，1981：利用動向調査報告書・知床地区，pp.107.

国立公園協会，1990：自然体験活動推進方策検討調査，pp.122.

沼田　眞，1982：環境教育論 ― 人間と自然の関わり ―，pp.211．東海大学出版会.

渡辺　修・大谷直史，1992．現代日本人の自然認識（Ⅰ）― 国立公園利用者の自然利用形態と意識 ―．日林論102：p.191－192.

渡辺　修，1992 a：アンケート調査による国立公園における周遊型利用の検証．国立公園，507：p.18－23.

渡辺　修，1992 b：知床「車両規制」計画と国立公園利用のあり方 ― 国立公園と周辺住民の関わり ―．国立公園，509：p.14－20.